

博士論文要旨

芸術研究科 芸術制作表現専攻
申請者氏名 ブライスタイン 佳優

論文題目 ステンドグラス — その表現と探究 環境問題を主題に

本論文は、芸術研究科博士課程におけるステンドグラス作品の制作にあたり、環境問題を主題とした表現を探究するための研究をまとめたもので、5章からなる。

「序」では、研究の目的と意義を中心に言及する。1つ目の目的は「独創的なステンドグラスを制作し展観すること」であり、2つ目の目的は「本研究を通じ、環境問題について自己の認識を向上させること」という2つである。

「第1章 芸術と社会問題」では、社会問題を主題する作品を制作した、3名の作家ヴィック・ムニーズ、オラファー・エリアソン、クリスチャン・ボルタンスキーと1組のアートユニット米谷健+ジュリアを挙げる。社会問題という主題について異なる観点から作品を展開してきた各作家の背景と制作過程、多彩で独創的な表現方法について述べる。

「第2章 環境問題の現在地点」では、様々な環境問題の内、本研究で取り扱うのは、海洋プラスチックゴミ問題、土壌汚染、地球温暖化を取り上げた。研究を始めるにあたり、環境問題について深く理解を得るため、先に挙げた各問題の現状を調査し言及する。まず最初に、海洋プラスチックゴミ問題について、世界の海に浮流するプラスチックゴミの実際の量、内訳、問題点を考察する。次に、我々が普段捨てているゴミはどのように処理されるのか、現在行政で行われているゴミ処理方法を述べると共に、自治体としてゴミを排出しない方法を探究し成功を取めている徳島県上勝町「ゼロ・ウェイスト宣言」と、個人でゴミを排出しない生活を手探りで実行しゼロ・ウェイストを達成した、カリフォルニア在住のフランス人ベア・ジョンソンの例を挙げる。そして、普段、我々が気づきにくい土壌汚染の惨状と問題点について述べる。また、現在、世界各国で解決に向け協議を重ねている地球温暖化について、その原因と解決の糸口の例を挙げ述べる。これらの調査で得たことは、作品制作の起点となるものである。

「第3章 日本人の美意識と環境調和」では、本研究で制作する作品の主題が環境問題であり、そこに日本人の美意識を包含させた表現を用いるため、江戸の美徳、用の美、茶の湯の美、禅の美を取り上げ考察し、こうした日本人の美意識が環境調和をもたらしていることについて論究する。まず最初に「江戸の美徳」では、江戸時代、人々はモノを無駄なく使い、サーキュラーエコノミー＝循環型経済社会の前例であったことを述べる。次に「用の美」では、モノを大切に生活の知恵と文化の中から生まれた用の美は視覚的に美しさをもつだけでなく、美徳を生み出した精神性も美しいことを述べる。さらに「茶の湯の美」では、普段見過ごしてしまうモノを見直し再創造（リクリエイト）すること、環境問題の解決の一助である再利用（リユース）との共通点について述べる。最後に「禅

の美」では、禅の世界に見られる、研ぎ澄まされた簡素な美は、空間を美しく磨くという行為と共に、心も磨くという修行によるものであることを述べる。そして、これら日本人の美意識では、モノを大切にすることを日本の独自の文化が土台としてあることについて言及する。

「第4章 環境問題を主題に」では、環境問題を主題とした各作品についての概要、制作工程、展示方法、考察について述べる。環境問題を主題とした作品制作の発端となる修士修了展での作品『Blue Ocean』から、現在の作品『Eternal Flowers』、『Signals』、『Sensors』を取り上げたが、ここでの作品は、プラスチック素材とガラス素材の2つの素材に分かれる。素材の違いを経験することで、改めてプラスチック素材とガラス素材について考える機会を得ると共に、古代から連綿と続いてきたガラスという素材は、サーキュラーエコノミー＝循環型経済社会に最適であることに言及する。

「第5章 ステンドガラスの新しい表現へ」では、建築素材としてのガラスに焦点を絞り、板ガラスの発明から色ガラスへの移行、ステンドグラス誕生の経緯、キリスト教にみる光の概念にふれ、その技法の発見とそれに伴う表現の変化について論究する。なかでも、20世紀以降の作品として、既存のキリスト教建築の概念とは異なる独創的なステンドグラスを制作した、アンリ・マティスの『ロザリオ礼拝堂ステンドグラス』と、ゲルハルト・リヒターの『ケルン大聖堂ステンドグラス』を例に挙げる。そして、長い歴史を経て、日本においては、明治時代に、ようやくステンドグラスがもたらされ、その先駆者となった宇野澤辰雄と小川三知について、言及する。欧米で技術を学び、その技術は、今現在も日本において、継承されている。さらに、現代のステンドグラス作品の中から、画家との協働作品の例として、JR上野駅、中央改札外コンコースに設置された、日本画家平山郁夫の『昭和六十年春 ふる里・日本の華』と、ステンドグラス作家、佐藤新平の特徴的な作品について述べる。それらの歴史的な流れを経て現代に至るステンドグラスの新しい表現を探究し臨んだ、『Floats』と、修了作品『Okeanos』について、それぞれの概要と制作工程を詳細に述べる。

「結」では、研究の成果と今後の展望について総括し述べる。

研究の成果は3つ挙げられる。

1つ目の成果は、研究の目的の1つである、「独創的なステンドグラスを制作し展観すること」について、ステンドグラスは建築に施工されることが大半であるため、限られた主題で制作されることが多いが、環境問題を主題とし建築から独立した芸術作品として、日本人の美意識の一つである簡素な美、そして、そこに通じるモノを大切に扱う日本人の心の美を内包した作品を制作することで、ステンドグラスの可能性を切り開くことができた。

2つ目の成果は、研究の2つ目の目的である、「本研究を通じ、環境問題について自己の認識を向上させること」は、研究の調査と実際に廃棄されるモノと向き合い制作することで、環境問題に対して認識を向上することができた。このことは、次の作品制作へと繋がる。喫緊の課題である現状を示すことが作家にとっても急務である。

3つ目の成果は、芸術という立場から環境問題を提示したことである。環境問題は様々な分野からの問いかけが役立つ。特に芸術は、文字や言葉にはない発信力と伝播力、影響力をもつからである。

今後の展望については、本研究において、観者が環境問題に対して思考する時をもち、認識の向上を促すことができるような作品を目指した。しかし、観者が環境問題について認識を向上したか否かについては制作者には分からないため、観者との対話をもつことが好ましい。このような理由から、環境問題を主題とした芸術作品を展示する際、同時にアートを媒体にしたワークショップを開催し、誰もが気軽に環境問題にふれる機会を作ることを用意している。